被災地で復興支援に取り組むNPO等の活動を紹介します。

Revival spirit **復興スピリット**

第1回

釜石市災害支援ボランティアセンター（釜石市）

地域のニーズが変化するのを見ながら対応する

復興の状況により、被災地でのニーズは刻一刻と変わる。それに合わせて、ボランティア活動の内容も変化する。釜石市の災害支援ボランティアセンターで、活動における苦心談を聞いた。

釜石市災害支援ボランティアセンター　受付

釜石市災害支援センター　佐々木さん

ゼロからの出発

釜石市でボランティア活動に参加した人は、9月初旬までに2万7千人を超えた。現在も毎日、全国からボランティアが来ており、つい先日も、個人ボランティアの方たちで結成された「チーム023」の方々と関東方面の個人ボランティア有志6名が、鵜住居地区のガレキの撤去と倉庫の整理をした。

「釜石市災害支援ボランティアセンターが立ちあがったのは、震災から2、3日後、混乱のさなかでした。初期の段階では、ボランティアの受け入れ体制ができていなかったので、市内のボランティアだけを受け入れました。」センターで活動している佐々木英之さんは語る。「少ないスタッフで運営していました。こちらから何もお渡しできないままの状態で、ボランティアの皆さんに活動に入っていただくという形でした。」

被災者のニーズを探りながら

被災された方自身が、何をどこまで頼んでいいのかわからないほど大変な状況だった。そのような中でも、地域の方々の要望を探り出しながら、少しずつ活動に取り組んだ。家財の片づけ、ガレキの撤去や泥出し、仮設住宅への引越しの手伝い、写真の洗浄と整理、青空市の準備と当日の手伝い、草刈り、仮設住宅談話室でのお茶っこサロン開催…。活動は多岐に及んだ。

「当初は、郷土資料館という建物の中だけで、すべてを運営していました。200人くらいの市内の方たちに手伝ってもらいました。仕事としては、シープラザYOUという建物のテントの中に入ってきた支援物資の積み卸し、整理、灯油の配布などでした。避難所のトイレ掃除の依頼にも応じました。」

全国から初動支援が

少ない人数で立ちあがったセンターだが、3月の末には神奈川と山梨のボランティアセンターから10人ほどの運営スタッフが1週間交替で派遣されてきた。中央のネットワーク組織である「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議」からもスタッフが応援に駆けつけた。この組織は、2004年の新潟中越地震の後、2005年1月より（社福）中央共同募金会に設置されたものであり、この応援もあって、やっと体制が整ってきた4月下旬からは、市外からのボランティアを受け入れられるようになった。

全国からたくさんの応援が

その後も、ボランティアは全国から来てくれている。大阪、京都、奈良などの近畿方面や、九州、沖縄などの遠方から来てくれる方もいる。ボランティアは、平日で150人から200人。土日には岩手県立大学が全国の大学のボランティアをとりまとめてくれるなど、400人近くになることもあるという。

長野県のお寺の副住職でNPO法人の理事長であり、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議から派遣されている宮下俊哉さんは、1週間程度の滞在を数回行い、滞在延べ日数は30日にも及ぶ。「私はボランティアセンターの運営の方を手伝っています。釜石の方のために、少しでも力になれればということで、務めさせていただきました。」と活動を振り返る。

ニーズに応えることの難しさ

出てきた要望に対してどう対応していけるのか、ボランティアセンターでどうお手伝いができるのかという模索がずっと続く。ボランティアの難しさはこういう点にあるようだ。

「最近の活動は、仮設住宅から一般住宅への引っ越し、仮設から仮設への引っ越しに徐々にシフトしています。ただ、重機での作業のあとでないとボランティアさんに入ってもらえないようなところもありますから、ある程度重機での作業をしたあとに、ボランティアさんに手作業でお願いしたいというニーズもあります。

実際に街を歩いてみるとまだまだだなという場所もありますが、その地域の人たちがボランティアセンターに依頼してきたときの応援体制は整えているつもりです。「このような活動が必要ではないか。」と推測できることもありますが、実際に活動するときは、ニーズを聞いてからの対応という形にならざるを得ません。自分達の考えているニーズと地域のニーズが必ずしも同じではないので、そのあたりに苦労があります。」と佐々木さんは語る。

●ボランティア募集中

釜石市災害支援ボランティアセンターでは、引き続きボランティアを募集しています。地域のニーズの状況によっては人数を制限する場合もありますので、事前のお問い合わせをお願いします。

なお、活動参加の際には下記の準備を整えてください。

①ボランティア活動保険（天災型）への加入

※ 地元の社会福祉協議会で事前に加入してください。

②宿泊先の確保

※ テントの設置、避難所への宿泊はできません。

釜石市内の宿泊施設について

◇釜石観光物産協会のホームページ内で紹介しています。

http://www16.plala.or.jp/kamaishi-kankou/

釜石市災害支援ボランティアセンター連絡先

住所：釜石市鈴子町 15-2
シープラザ大型テント隣
TEL：0193-22-2310
FAX：0193-22-4650
※8時30分～16時30分
（月曜日はお休み）
http://blog.canpan.info/kamaishi-vc/

私の活動体験記

第1回

岩手大学ボランティアサークル「天気輪の柱」で活動する
坂本 龍 さん
宇部 陽子 さん

このコーナーでは、NPO・ボランティア活動に参加した方々のお話しを紹介します。今回は、岩手大学の災害支援ボランティア団体で活動しているお2人にお話しを伺いました。

泥出し作業

「天気輪の柱」は、岩手大学大学院1年の萩原亜弥香さんがメンバーを集め、震災から1週間目に立ち上げたボランティアサークルである。「天気輪の柱」は、宮澤賢治の童話「銀河鉄道の夜」の中で、人の幸福について考え出す重要なキーワードとして出てくるものであり、「東北沿岸部は辛く大変な状態が続いているが、ここ『天気輪の柱』から、明るい目的地に再び進んでいければ。」という思いから付けられた。

◀坂本さん

「ボランティア活動をしたいという思いは、もともと自分の中にありました。そんな時、友人からボランティア募集のメールが転送されてきたので、この活動を知って、参加することにしました。3月11日の夜、停電で真っ暗な中、ラジオでニュースを聞きながら、何もできなかった自分がふがいなく思えて、自分に何かできることはないのかなと思ったのが参加のきっかけでした。

ニーズ調査をしたり、側溝の泥をとったりと様々な活動をしたんですけど、一番印象に残っているのは『思い出探し隊』の活動です。個人の家の近くに行って、津波に流された写真など思い出に残る物、大切な物をガレキの中から探して分別しました。そこで預金通帳を見つけて、家のおばあさんからすごく感謝されたのを覚えています。

活動して思ったのは、とにかく復興には長い時間がかかる。5年10年では完全復興はできないんだろうなということでした。津波の被害というのは大きく、途方もない感覚に襲われたというのが一番大きな印象でした。

今後は、大阪の会社に就職が決まっています。東北での就職も考えたんですが、自分としては遠くで働いても、逆に岩手の、東北のためにできることがあるのではないかと考えています。就職活動も地震のさなかにしたけれど、このことが自分の進路に影響を与えたと感じています。建設環境工学科なので、将来、災害復興に関わることも考えられます。今回のボランティアの体験は、これからの仕事に役に立つと思います。岩手にいるのはあと半年しかないので、積極的に被災地に行って、学生にしかできない、若い力を使った活動を通して被災地のためになればと思っています。

側溝清掃

ボランティアについては、一般の学生の参加が少ないので、活動をしている自分たちとの温度差を感じます。これだけの災害が起きたのに、ボランティア活動に参加するのはこれだけの人数なのかなと。そういうのも仕方ないのかなとも思いますが、ボランティアに消極的な学生を巻き込んでいくのも自分たちの仕事かなと思っています。」

◀宇部さん

「震災のあと、何もできない状態が続きました。電気が復旧してからも、テレビから流れてくる被害の情報を見るだけで、自分では何もできないまま時間が経っていきました。自分に何かできないかと思っていたときに、こういうボランティアをやっている団体があることを知って、参加してみようと思いました。盛岡YMCA宮古ボランティアセンターで災害ボランティアに取り組んだのですが、まず、各家庭を徒歩でまわり、宮古で被災した方々がどういう事を望んでいるのかを聞くところから始めました。お年寄りが多いので、道路や家の泥の除去と清掃などの一人ではできない作業のお手伝いをしたりしました。次第に、地域の方々が要望を出してくれるようになりました。地域の方に声をかけられて、お花見をしたり、タコ焼きを焼いて食べていただいたりもしました。岩手大学の学生ということで被災地の方に親近感を持ってもらえたので、今まで岩手大学の学生として県民の皆さんにお世話になってきた分、恩返しじゃないですけれど、できる限り被災地に行って活動は続けていきたいと思います。ボランティアが必要とされる状況はまだまだ長く続きそうですし。

復興には、かなり時間がかかるだろうということも感じますし、大変だなと思います。一方で、被災した方々が少しずつ元気を取り戻していく姿が見られましたし、ボランティアに行くたびに少しずつ地域の人が変わっていくのが分かります。長い時間はかかるだろうけど、着実に前に進んでいる実感はあります。」

●「天気輪の柱」の活動場所：

岩手大学中央学生食堂2階
（岩手大学学生ボランティア団体協議会内）
連絡先：電話019-621-6630
E-mail ygakusei@iwate-u.ac.jp